SPECIAL

特集

「NHOの救急医療」

国立病院機構

横浜医療センター

"攻めの救急"を展開し、 地場産業として地域を守り抜く

横浜医療センター 副院長・救命救急センター長 古谷 良輔

ドクターカーの運用など"攻めの救急"を展開する横浜医療センター。 COVID - 19感染症への対応をはじめ、救急科の魅力や救急医として必要なマインドなどを、 救命救急センター長の古谷良輔先生に伺いました。

横浜医療センター 「救命救急センター」の特徴

横浜医療センターの「救命救急 センター」は、2010年4月1日に当 院が新病院として開設し、横浜市南 西部地域中核病院に指定されたこ とに伴い機能を大幅に拡充して新 装されました。

地域のニーズに応えるため、集中 治療を必要とする3次の重症患者の みならず、軽度・中程度患者といっ た全ての症例に24時間365日対応 し、年間の救急搬送受入件数(2020 年度)は4,650台となっています。



私は新病院の開設と同時に当院 に赴任し、それまで横浜市にはな かった病院前救急、集中治療、救急 病棟での管理といったシームレス な診療を提供できる救急を目指し、 いち早く現場に急行して一人でも 多くの患者さんを救うためにドク ターカーを導入するなど"攻めの救 急"体制を強化してきました。

また、地域の医療機関からの転 送依頼にも積極的に応需しており、 当センターで加療した後、地域の医 療機関に治療継続をお願いすると いった密な連携によって、相互機能 を活かした地域完結型の救急や集 中治療を提供しています。

COVID-19感染症対策において も当院の通常救急体制を維持する ために、普段からの連携ネットワー クを活かした近隣医療機関との転 院調整や、最新情報の共有などに よって近隣地域にクラスターが起 こらないよう感染対策につなげて きました。

船内クラスターが起きた横浜港 のダイヤモンド・プリンセス号は、 当院の感染症医療に大きな影響を 与えた"黒船" であり、COVID - 19 に対峙した経験は感染症対策や感 染症診療の飛躍的な向上をもたら すなど、新たな強みを得ることがで きたと感じています。

救急科の魅力と 救急医として必要なマインド

救急の現場では、さまざまな想 定外のことが降りかかってきます。 救急医にとって、そうした状況に遭 遇した際、「せっかくだから」と前 向きに考えることができる"折れな い心"が大切です。「せっかくの機 会だからやってみよう!」「せっか くだから、こうしてみよう!]といっ た、救急医の前向きに医療に向かう "折れない心"は、チーム医療や他科、 多職種との連携など組織全体をま とめるためにも必要なスキルであ

ると思っています。

また、救急は他科、多職種、さら に地域のクリニックや病院との連 携も重要です。救急医はチームの スタッフたちが不安なく対応でき ることや、みなが自由に意見を発信 できるような組織づくりができる 能力も求められます。救急医にな ることで組織を動かすマネジメン ト力も獲得できるでしょう。

そして、救急医の一番の原動力 は「ありがとうございました」と患 者さんやご家族の方に言っていた だけることです。さらに救急は現 代社会における課題などと密接に 関わっているため社会貢献もでき るなど、非常に大きなやりがいを得 られる診療科です。

救急体制の課題と今後の目標

救急医療は"地場産業"です。救 命救急センターを運営していると 横浜市、神奈川県とだんだんスケー

特集「NHO の救急医療」横浜医療センター

ルが大きくなりがちですが、当院でいえば病院の位置する戸塚区のニーズにしっかり応えられる、地域に根付いた救急医療を提供することが重要です。

逆に当院の救急医療体制を日本 全国に当て嵌められるかというと、 そうではありません。救急医療は "地場産業"として、周辺地域の命を しっかり守ることが大切であり、現 在、災害医療などがクローズアップ されていますが、病院業務を二の次 にして、どんどん災害派遣に出てい くような風潮は良くないと感じて います。

今後の目標としては、ドクターカー、救急外来、入院調整センター (PCC) でのカルテ入力におけるIT 導入により、業務の効率化を図っていきたいと考えています。デジタル全盛ですが、ゼロと1のみでは現まれるデジタルな関係のみのではあり、当院の対産はあくまで"ひと"であり、当院の救急部門から人間力をもちたいです。

医学生や若手医師へのメッセージ

横浜医療センターは、各診療科間にも多職種間にも壁はなく、横のつながりが非常に強く、多角的にバランスよく研鑽を積むことができます。また、どの診療科に進むでしても、全診療科の先生方は教育熱心であり、人と人との繋がりやコミュンを大切にした医療であるため、無口で消極的なカリョンを大切にはかった医師になっても初期研修が終わるころにはしっかり自己主張ができ、コミュニケーション能力に優れた医師になっているはずです。

横浜市には、横浜市立大学や昭和大学、聖マリアンナ医科大学などの大学病院、さらに横浜市立みなと赤十字、横浜市民病院、済生会神奈川病院といった病院母体の異なる中核病院が揃っており、しかも何でも話せるような良好な関係にあることが特徴です。こういった都市

部は他になく、いろんな組織の人たちと繋がりができることで視野が広がり、新たな自分の可能性を見つけることもできるでしょう。

若い医師のみなさんには、迷ったり、未知のものを目の前にしたときには、立ち止まることなく、"とりあえずやってみる精神"で次の一歩を踏み出してほしいと思います。そうして得た数々の経験は医師としての大きな力となるはずです。





SPECIAL

特集「NHOの救急医療」横浜医療センター



<u>カンファレンスを通して</u> プレゼンテーション能力を獲得

横浜医療センター 副救命救急センター長 大塚 剛

救命救急センターでは、軽症であろうと重症であろうと全てのCOVID-19感染症患者さんを断ることなく診てきました。いつ急変するかわからないため、救急医としての幅広い視点が非常に重要となるからです。

入口で対応していくことは大変ですが、救命救急センターのスタッフ全員が救急科で診ることは当たり前だと思って診療にあたっています。実際、現場でCOVID - 19感染症患者さんを診ていると急変することが多く、救急医が早期に介入する大切さを理解しているからです。

また、ある程度状態の安定した 患者さんは内科の先生をはじめ泌 尿器科や整形外科の先生もその後 の治療を積極的に引き受けてくだ さり、こうした他科の強力なバッ クアップのお陰で通常救急体制を 維持することができていると感じ ています。



救急科の医師は救急現場で前面に立つことはもちろん、病棟で急変があったときに呼ばれることも多く、他科を支えるという側面もあり、いろんなポジションを担っている診療科です。患者さんやご家族からはもちろん、他科の先生からお礼を言われることも非常に大きなやりがいとなります。

医師の道を選んだからにはどの 科でも興味をもってやっていける と思います。さまざまなことに迷 わずトライしてほしいですし、多 くを経験するなかで救急科を選ん でもらったら嬉しく思います。



国立病院機構 横浜医療センター

生所 〒 245-8575 神奈川県横浜市戸塚区原宿 3-60-2 WEB https://yokohama.hosp.go.jp/

^療 510床 № 32科

横浜医療センターの特徴

政策医療7分野(がん、循環器疾患、精神・神経疾患、成育医療、内分泌・代謝疾患、骨・運動器疾患、肝疾患)については、横浜医療センター独自あるいは国立がんセンターなど国立のネットワークで連携して先駆的医療や難治性疾患の診療を提供している。



救急医として大切なのは "周りの声を聴ける力"

横浜医療センター 救急救命士 吉田 敦

救急医はチーム医療の中心となり、他科、多職種をマネジメントする力も求められます。救急救命士として、救急医の先生方をみて感じているのは、"周りの声を聴ける力"があることです。

そして、横浜医療センターは、 ドクターカー導入による病院前救 護への取り組みなど、医療に挑戦 できる病院です。若い医師の方で も自分のやりたい医療があれば 積極的に挑戦してほしいですし、 我々スタッフみんなでしっかり バックアップしていきたいと思っ ています。

COVID-19感染症に対応してい



くなかで、救急がどこまで頑張れるかどうかが日本経済にも影響を与えるなど、「救急はこんなにも大きな社会影響を与える医療なんだ」と改めて感じています。救急医療に携わる意義は社会的にも大きく、やりがいも非常に大きな診療科です。